

陸羯南におけるジョゼフ・ド・メーストルの受容について

影 浦 亮 平

〈Summary〉

The reception of Joseph de Maistre in Kuga Katsunan's thoughts hasn't had adequate study done on it. This article demonstrates that it is possible to find decisive influences of de Maistre on Kuga. Whereas the first generation of Japanese intellectuals in Meiji era like Fukuzawa Yukichi tries to absorb and assimilate European ideas and knowledge, Kuga learns from de Maistre how to resist the Europeanization of Japan. Kuga's nationalism maintains the Japan's "independence" and "unification", and however, it does not refuse European ideas and knowledge. It comes from Maistrian communitarianism against the individualism of the Enlightenment. And it also means the Japan's "independence" and "unification" embrace the contradiction of its base on Joseph de Maistre, namely, a foreign ideology. The birth of Japanese nationalism in Meiji era includes such a contradiction.

1. イントロダクション

本論文は、サルディニア王国の外交官・司法官にして反革命のカトリック思想家、ジョゼフ・ド・メーストル（1753-1821）の思想が、明治期の政治評論家の陸羯南（1857-1907）の思想にどのような影響を与えたかを明らかにすることを目的にする。まずド・メーストルと陸羯南について簡単な説明をしたい。ド・メーストルは、フランス革命期における反革命思想で知られており、後のフランスやドイツの反啓蒙主義の思想的潮流の中で影響力をもった思想家である。著作に関して言えば、1792年にフランス共和国軍がサヴォワに侵攻した後、彼がスイスのローザンヌに亡命していた際に著した『フランスについての考察』（1796）があるが、これはヨーロッパ中の亡命貴族や反革命派の人々の間で有名になった。さらに1802年、彼がサルディニアの大使としてロシアの当時の首都サンクトペテルブルグに赴任した際に執筆した『サンクトペテルブルグ夜話』は、一般に彼の主著とみなされている。フランスの思想史や文学史の中ではたしかにジョゼフ・ド・メーストルの名は刻まれているのだが、しかし日本では今日までも十分な紹介はされてはいない。そのことを端的に示すのは日本におけるド・メーストルの翻訳の状況である。今日までにふたつの翻訳しか出版されていない。ひとつは、1885年に博聞社から刊行された『主権原論』（陸羯南訳）であり、もうひとつは1948年に中央出版社（現在はサンパウロ）から刊行された、『サン・ペテルスブルクの夜話（仏蘭西カトリック思想家選2）』（岳野慶作訳）である。そ

のふたつの翻訳本のうちの一冊の『主権原論』は1885年ということで、日本におけるジョゼフ・ド・メーストルの受容史が極めて貧困な状況を鑑みた場合に、この翻訳時期の早さが際立っている。そして、このド・メーストルの最初の翻訳者が、明治時代の日本のナショナリズムの代表的論客の陸羯南であることは注目に値することである。ここから、明治期に生まれた日本のナショナリズムとド・メーストルの思想との間に、どのような関係があるのかという本論文の関心が引き出される。

陸羯南は日本のナショナリズム（彼の訳語では、国民論派）を初めて定義した思想家として知られている。彼は戦後すぐに再発見され、再評価された。それにあたっては日本の戦後思想家の代表格である丸山真男の論文が大きな役割を果たした。その論文、『陸羯南一人と思想』の有名な序論は陸の戦後の評価に大きな影響力をもっているので、ここで引用しておきたい。

言葉もまたその運命をもつ。日本精神とか国粹とかいう名は、ついさきごろまで、あらゆる価値の源泉であり、すべての主張ないし運動はその名において己れを合理化しようと競っていたのに、いまやそれは無知と蒙昧と誇大妄想のシノニムとして侮蔑と嘲笑のうちに歴史的過去の彼方に遺棄せられようとしている。今日「日本」イデオロギーと封建的的反動との結合はほとんどアブリアリであるかにみえる。しかしどのような兇悪な犯罪人も一度は無邪気で健康な少年時代を経てきたように、日本主義の思想と運動も、大正から明治へと遡つてゆくと、最近の日本型ファシズムの実践と結びついた段階とはいちじるしくちがつた、むしろ社会的役割において対蹠的のといえるほどの進歩性と健康性をもったものにゆき当るのである。明治二十年代の日本主義運動がそれであり、その最も輝けるイデオログの一人がここに叙べようとする陸羯南である。¹⁾

戦前は是とされてきたイデオロギーの評価が戦後反転する中で、陸羯南の思想は例外的であると丸山は評価している。進歩的かつ健康的な日本ナショナリズムとして、陸羯南の思想を肯定的にとらえるパラダイムを彼は提供した。このパラダイムの下、陸羯南についての研究は今日まで積み上げられてきている。

まさしくこの進歩的で健康的な日本ナショナリズムとされるものこそがジョゼフ・ド・メーストルの思想の影響下にあるものであって、その意味では日本のナショナリズムがそれ自体の定義に反して、決して日本固有とされるような何らかの思想から派生したものではなく、外部から受け入れた外来思想であるというテーゼを、本論文は論証する。丸山の言う「進歩的」、「健康的」が指している陸のナショナリズムの特性は、後に詳述するが、まさしくド・メーストルの思想から受容したものであることが明らかにされるだろう。

2. 先行研究

陸の思想についての先行研究は戦後数多くあるが、その一方で陸の思想におけるド・メーストルの思想の受容についての先行研究は数少ない。ただし『主権原論』の翻訳の仕事は、陸の思想形成期における最も大きな仕事であったことは史実の範疇に入る事柄である。したがって、ド・メーストルについての言及は、陸に関する書物の中ではよくなされる。このような研究書におけるド・メーストル評価についてはひとつ傾向性なり政治性が認められる。陸とド・メーストルの思想の異質性を強調する趣旨の言説でもって、陸研究におけるド・メーストルの相対的評価を下げ、そしてド・メーストルの原典を精査しないことの正当性を主張するというものである。このような従来の研究には学問的に不正確かつ恣意的なものが含まれていることを本論文は、本格的な検討に入る前に指摘しておきたい。そのために従来の研究におけるド・メーストルに関わる記述を最初にいくつか見ておきたい。たとえば『近代日本政治思想史入門』（1999）という近代日本政治思想史の教科書の中の第5章で陸羯南が論じられており、そしてその中でド・メーストルとの違いについて論じられている。

（……）一方で民衆の自覚的な統合を訴えると同時に、他方で政府に対しては、世論を十分に反映した政治を強うながしたのであった。その点で、ド・メーストルとの違いはむしろ際立っている。羯南が、思想的立場として伝統的主義をとりながらも、具体的な政論上においては、一貫して藩閥政治に対する厳しい批判的姿勢を維持できた理由はここにある。²⁾

この記述に従えば、現状の政治に対して批判的態度を陸がとれたのに対して、ド・メーストルはそうではなかったことになる。しかしそれはド・メーストルに関する史実を無視している。彼が仮に現状の政治に対して現状追認のであるならば、フランス革命やそこから生じた政治に対する批判を書く必然性がそもそもないことになる。この記述においては、ド・メーストルの置かれていた政治的なコンテキストが捨象されており、不正確で恣意的な評価を彼に押し付けていると言ってよい。

別の例として、松田宏一郎の『陸 羯南』（2008）を挙げたい。松田も、陸の思想とド・メーストルの思想は異なると主張する。

なお、羯南訳『主権原論』の中に「レーゾン・ナショナル」といった言葉がカタカナのまま引用されており、ここから羯南が「国民精神」といった発想を学ぶきっかけがあったのではないかと見ることも不可能ではないが、そもそもド・メーストルは反革命の立場で君主主権と教会の権威を強調し、その限りでは国民主権というよりも、キリスト教の権威を中心に据えた反・理性中心主義者である。ここから「国民精神」の積極的な意味づけを読み出すのは適切ではないし、またもしそうであるとしたらやや誤読になってしまう。羯南の訳を見る

限り、『主権原論』の翻訳が後年の「国民主義」思想に結びついたようには思われぬ。³⁾

たしかに国民主権と君主主権とは異なるものだろう。そしてこの説に従えば、陸は国民主権を支持し、ド・メーストルは君主主権を支持していることになる。しかし、では陸の「レーゾン・ナショナル」ないし「国民精神」は国民主権と同じものなのかと問うてみれば、陸の『近時政論考』から「国民論派は天皇の大権を固くせんことを期す」⁴⁾という一文を引いてくるだけで一蹴することができる。もしかしたら著者は陸の国民主権は通常の意味の国民主権とは異なる意味と主張するかもしれないが、しかし通常の意味でないならば君主主権と対置させることはできなくなる。以上から、ここにおいても、脆弱な論証でもって、陸とド・メーストルの思想を峻別しようとしていることが確認できる。⁵⁾

このように陸研究において、ド・メーストルを格下げする言説が、恣意的に積み上げられている。しかし陸に対するド・メーストルの影響を論じる研究者もいる。有山輝雄の2007年の著書はそのような仕事であり、陸におけるド・メーストルの影響を考える際に大きな示唆を与える。彼は『主権原論』における「レーゾン・ナショナル」[raison nationale]というフランス語に対して陸が付けた訳注を重要視した。「レーゾン・ナショナル」は後の陸の主著の『近時政論考』における「国民精神」につながっていくものであるが、その訳注は以下の通りである。

其の国を挙げて是とする所の一種の精理を云ふ。国理と直訳するも妥当ならず。故に原語の儘を記す。読者此の章の題言に云ふ国民思想即ち我が大和魂の如きもの、是認する理論なりと解せば大過なかるべし。⁶⁾

この訳注に注目しながら、「レーゾン・ナショナル」という概念を陸は「大和魂」と同質の概念として理解したということを有山は指摘している。本論文もこの指摘から陸におけるド・メーストル受容についての考察を次章で行うが、有山自身はこの脚注から陸の『主権原論』の翻訳作業について以下のように結論づける。

この書の翻訳学習は、羯南にとって新たな思想境地を開くものであった。彼は、自由民権派などが持ち出すルソー思想を乗り越えた西欧思想を学習し、紹介する位置にたったのである。(……)しかも、これまで、彼の内面にわだかまっていた欧化への反発、その表現として勤王主義などは、「レーゾン・ナショナル」からすれば正当なものであって、「国家の情理」形成にとって不可欠なものとして再評価されることになった。欧化への同調と反発という相反する意識が、表面的な欧化、それへの反発、さらにそれらを止揚する近代(西欧的)国家形成として弁証法的発展として整序できることを学んだのである。⁷⁾

ここでは陸におけるド・メーストル受容についてのひとつの解釈のしかたが提示されている。陸

はド・メーストルの思想を日本の伝統的価値観を擁護し、啓蒙思想に代表されるヨーロッパの価値観に対抗する思想として理解しようとしたのではないかということだ。ただし、次章以降で取り扱うが、ド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」の概念における啓蒙主義的価値観に対する同調と反発はけっして相反するものではなく、むしろひとつの現象の表裏の関係にあるが如きものである。有山の議論に不十分な点として、陸が日本精神ならび国民精神をド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」に見出していることを有山自身が指摘しているにも関わらず、当のド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」に対する理解がないことを挙げるができる。つまり原典にあたった形跡がないということである。本論文は、したがってド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」とは何であるかを明らかにし、そのことによって陸がド・メーストルから何を受容したのかということをはっきりさせる。

ド・メーストルの原典にあたりつつ、彼と陸の関係について論じた初めての論考は岡和田常忠の『陸羯南とジョゼフ・ド・メーストル』⁸⁾である。『陸羯南全集』を編集する際、編者が陸の翻訳と原典の照合を岡和田に依頼した旨が『陸羯南全集』のあとがきに書かれているが⁹⁾、その成果がこの論考である。この論考においては、陸が『主権原論』を翻訳する際、どのような訳語を選択したかに注目している。同じ方向性の研究として、田所光男の研究が挙げられる。田所は1987年の『福岡大学人文論叢』19号第1巻、第2巻、第3巻において、陸に対するド・メーストルの影響を検討する論文を発表している¹⁰⁾。ド・メーストルの原典にあたって、陸におけるド・メーストル受容を考察した研究としては、これら一連の田所の仕事が最も重要なものである。田所の仕事の優れているところは、訳語の選択に注目することで、陸がド・メーストルをどのように自らの思想にしていっていったかを明らかにし、また陸の文章のなかには、特に断りが無いものの、ド・メーストルの文章の引用が暗になされたりしている部分が存在することを明らかにしたことだ。しかし、これは岡和田の論考にも言えることだが、訳語の選択から陸の思想を明らかにしていくという目標設定がなされている関係上、ド・メーストルの思想それ自体を明らかにしたうえで陸の思想との関係を検討することはそれほどなされていない。本論文は、その検討をなすことによって田所の仕事を補完する試みであると言えるだろう。

3. 『主権原論』の検討

以上の研究動向の下、陸羯南におけるジョゼフ・ド・メーストルの受容を検討する。検討にあたって、先ほどの章でとりあげた『主権原論』(*Étude sur la souveraineté*, 1794)¹¹⁾の脚注が重要である。それは陸がド・メーストルをどのように理解したかを端的に示している。ド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」とは「大和魂の如きもの」、すなわち日本国民の精神性に対応するものであると陸は解釈した。そこで、そのレーゾン・ナショナルとは何なのかが問題になる。その点につき、その問題の訳注がある『主権原論』の第一篇第十章「国民の気風を論ず」(Livre I, Chapitre X, De l'âme nationale)は重要な章である。この章はまず *préjugé*, すなわち先

入見（陸の訳語では、「先入の説」）の重要性を説いている。

Il n'y a rien de si important pour lui [l'homme] que les préjugés. Ne prenons point ce mot en mauvaise part. Il ne signifie point nécessairement des idées fausses, mais seulement, suivant la force du mot, des opinions quelconques adoptées avant tout examen.¹²⁾

陸の翻訳の以下の通りである。

即人類の為には夫の先入の説より必要なるもの未之あらざるなり。斯に先入の説と云はば、人或は其の字義に就きて善良ならざる意味を有するものと解釈することあらんも知る可らずと雖、是れ決して然らず。元來此の字義は未一切の考究を為さざる以前に於て既に定めたる説と云ふに過ぎざれば、決して悪意ある文字には非ざるなり。¹³⁾

「先入の説」とは、このようにあらゆる考察の以前にあって、考察の出発点となる知であるとされる。あらゆる考察の前にある以上、先入の説それ自体が正しいかどうかは精査され得ない。それはただ信じるより他ないものである。具体的にはそのような知とは何かといえ、それは中世以来のヨーロッパのカトリックの伝統知である。啓蒙主義哲学はこの先入見を迷信として排除することを自らのスローガンとして掲げている。啓蒙主義哲学と言っても、それぞれの哲学者の思想に多様性があるが、その中でもカントの『啓蒙とは何か』（1784）は啓蒙主義哲学と呼ばれる哲学の共通項を明示していると言ってよい。『啓蒙とは何か』において、啓蒙について以下のように定義されている。「啓蒙とは何か。それは人間が、みずから招いた未成年の状態から抜け得ることだ。未成年の状態とは、他人の指示がなければ自分の理性を使うことができないということである。¹⁴⁾ 未成年状態とは、自らの理性を用いず、教会から与えられる教義に従属している状態である。そうした状態から抜け出して、自らの頭を使って考える大人になることが啓蒙の定義とされる。つまり、カントは個々人の理性の正当性を主張するとともに、カトリックの伝統知に権威を認める態度を排除するように求めている。先入の説と伝統知の重要性を説くことによって、そのような啓蒙主義に対する批判をド・メーストルは展開しているのである。

ド・メーストルの啓蒙主義哲学批判については彼の『ベーコン哲学の検討』（*Examen de la philosophie de Bacon*, 1836）において詳しい議論を見つけることができる。そこでは、啓蒙主義哲学は真理そのものというより、真理に到達するための方法を追及しており、その方法が知の正しさを保証しているとド・メーストルは論じている。そうした方法論の例として、ベーコンの帰納法が挙げられる。こうした方法論の本質は、既存の知の排除にあるとド・メーストルは考える。この方法論によって、過去に正しいとされた伝統知は検証不可能であるがゆえに、迷信という烙印がおされるようになる。これに対して、しかしこのような排除というやりかたは、真理が真理として認められる知の営みにそぐわないとド・メーストルは考える。ひとつの知が真理として認

められるには、真理として認められている他の知との整合性が必要だと彼は主張する。啓蒙主義哲学は、単独の形で正しいとされる真理の像を求めているが、ド・メーストルは真理の共同体的性格を主張する。ここで彼は決して既存の知、伝統の知がすべて正しいとは主張しない。間違っているものはある。しかしその知が間違っていることが示されるのは、これまで正しいと認められてきた他の知との整合性の中でのみであるというのが彼の考えである。「形而上学において明らかかなことがあるなら、それはいかなる真理も過去に確實だと認められた真理と、探す必要のある関係によって結び付けられてのみ、推論を通じて発見され得るということである。」¹⁵⁾ 単独の真理に絶対的なものはないが、真理の共同体は絶対的であるというのがド・メーストルの主張である。したがって、伝統知はたしかに間違っている可能性が常にあるが、しかしその間違いは伝統知の集合の中の整合性で判断されるより他はないので、すべての伝統知をまずは無条件に信じなければならないということになる。¹⁶⁾

このような共同性の中にある伝統知が「レーゾン・ナショナル」を形成するとド・メーストルは『主権原論』において主張する。

ou, plutôt, il faut que les dogmes religieux et politiques mêlés et confondus forment ensemble une *raison universelle* ou *nationale* assez forte pour réprimer les aberrations de la raison individuelle qui est, de sa nature, l'ennemie mortelle de toute association quelconque, parce qu'elle ne produit que des opinions divergentes.¹⁷⁾

又或は寧政教一致の定説を以て「レーゾン・ユニヴェルセル」即「レーゾン・ナショナル」と成さざるを得ず。蓋夫の各自理想は徒らに争論紛議を生ずるに過ぎざれば、共同一致の社会の為に永久の敵と認めざるを得ず。¹⁸⁾

ここで「定説」[dogme]は、先ほどの先入の説やカトリックの伝統知を指す。「各自理想」は *raison individuelle* に対する陸の訳語であるが、今日であれば個人の理性と訳するのが妥当であろう。つまりこれは啓蒙主義者たちが称揚していた概念である。そしてこの概念は人間同士を隔て、社会の共同性を失わせる。個人主義を称揚する啓蒙主義哲学を抑え込むためには、カトリックの伝統知は「レーゾン・ナショナル」を形成しなければならない。それはつまり、われわれはこれまで正しいとしてきた知の体系を決して放棄することなく、常にそれをわれわれの思考の出発点にしなければならないということである。そして「ナショナル」と「ユニヴェルセル」が同義だとされているが、それはこの「レーゾン・ナショナル」が普遍的なものであること、つまり真理であるということである。つまり、われわれの思考の出発点であるカトリックの伝統知は常に真理とされなければならないということである。「レーゾン・ナショナル」とはしたがって、伝統知が普遍的真理として受け入れられ、ひとびとの思考の土台とされるための精神的なつながりを指すのである。

ド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」にとって重要なのは、伝統知の絶対性である。ただし個々の伝統知は間違っていることはありうるし、それが新しい知にとって代わられる場合もあり得る。しかしそのようにして代わられる正当性は他の既存の知との関係性においてのみ保証される。その限りで真理の共同体の中の個々の真理は新しい真理に取って代わられることがあるとしても、それはその共同体の中での変動なのであって、共同体自体を揺るがすことはない。と彼は考える。そしてド・メーストルの場合はその共同体はカトリックの伝統知の共同体であるが、彼によれば、この真理の共同体は国によって異なるとされる。それぞれの国民は、それぞれ固有の真理の共同体を有しており、それを放棄してはならないとする。

ralliez-vous à la raison nationale qui ne trompe jamais. Souvenez-vous que chaque nation a, dans ses lois et dans ses coutumes anciennes, tout ce qu'il lui faut pour être heureuse autant qu'elle peut l'être, et qu'en prenant ces lois vénérables pour les bases de tous vos travaux régénérateurs, vous pouvez déployer toute votre perfectibilité sans vous livrer à de funestes innovations.¹⁹⁾

吾人は各々其の国の立つ所以を熟慮して可なり。読者記憶せよ。各国皆固有の旧法旧慣ありて、凡其の国の為めに得らる可き幸福の種子は皆其の中に在りて存す。而して此の貴重なる法を以て数世の研究の根基とする時は、悲愴なる変動に身を委するを要せずして、幸福を充溢するを得べきなり。²⁰⁾

この部分の陸の翻訳のクオリティは低いと言わざるを得ない。まず *régénérateur* の翻訳が「数世の」となっているが、これは「再生」や「再建」を意味する言葉である（陸は *génération* の類義語として取り違えたのだろうか）。つまり啓蒙主義哲学によって傷つけられた伝統知の共同体の再建を意味している。そして *perfectibilité* を「充溢」と訳しているのも不適切である。ここでこの言葉は完成の状態そのものを指しているのではなく、完成に向けて改良していくことができるということの意味している。これは *innovation*（陸は「変動」と訳した）という語と対になっている。過去の知を否定して新しい知を受け入れることを主張する啓蒙主義的態度が *innovation* という言葉に対応し、それに対して、過去の知を土台にして、新しい知を受け入れていく態度を *perfectibilité* という言葉に対応するとド・メーストルはしているのである。新しい知は過去の知の束であるところの「レーゾン・ナショナル」とは決して対立せず、それに取り込まれる。そしてその結果として「レーゾン・ナショナル」が改良されていく。このとき決して過去の知が否定されるわけではない。新しい知が自身の正しさを証明できるのは、ただ過去の知の集合との整合性を通じてのみだからである。それぞれの国民は、新しい知を前にして、自身の固有の伝統知を否定することなく、伝統知を土台にしなければならない。そしてその土台を通じて、新しい知を受け入れていく態度をとらなければならない。そのようにド・メーストルは主張

しているのである。

先ほどの翻訳ではうまくいっていなかったが、しかし知の共同体の改良可能性については、陸はよく理解していると言える。そのことを確認するために、この改良可能性について『主権原論』において別様に論じられている箇所注目したい。ド・メーストルにおいて、共同性が常に鍵概念になっているが、この共同性は、より正確に言う、精神的なレベルでも政治的なレベルでも同様にひとつの同じものとして取り扱われている。そこで政治共同体の改良可能性について彼が論じているところを参照する。

Au reste, comme toute proposition outrée est fausse, je n'entends point nier la possibilité des perfectionnements politiques opérés par quelques hommes sages. Autant vaudrait nier le pouvoir de l'éducation morale et de la gymnastique pour le perfectionnement physique et moral de l'homme; mais cette vérité, loin d'ébranler ma thèse générale, la confirme au contraire, en établissant que le pouvoir humain ne peut rien créer, et que tout dépend de l'aptitude primordiale des peuples et des individus.²¹⁾

予未「二三識者の力に因りて政治を完全ならしむるを得べし」と云ふことを駁するを聞かず。又夫の「修身と体操との教育は以て人の心身を完全ならしむべし」と云ふことを駁するを聞かず。然りと雖政治も人身も皆人為を以て完全ならしむることを得べしと云へる真理は、以て予が持説を動かすに足らざるのみならず、却て予の説を確実ならしむるものと云ふべし。何となれば此の真理を推すときは人力は以て何事をも創造し得ずと雖、天下百般の事物は皆人民及一箇人の本来有する所の才能に関して消長するものなりと結論すべければなり。²²⁾

共同体の改良可能性があることをド・メーストルは否定しない。修身教育や体操が人間の心身を改善することを否定しない一方で、しかしそうした改善も個人の元々の資質によって消長される。そういう意味で、共同体が改善されることがあるにしても、それは常に元々のあり方に依存するというのを彼は主張しているのである。この箇所に対して、陸は訳注を加え、そこで自身の解釈を提示している。

即国民は識者の力に依頼し、一箇人は心身の教育に依頼して、以て其本然に復することを得るを云ふ。之に因りて新たに創造し得るを云ふに非ざるなり。²³⁾

教育によって新しいことを習得するにしても、それは決して新しいことの創造ではない。つまり、それはゼロから何か新しいことを生じさせることではない。その新しいことは常に本然、つまり元々のあり方を土台にして習得され、そしてその土台の延長線上でのみ理解されるということである。ただし新しいことを学ぶことそれ自体を否定して、元々のあり方にしがみつくとはいえない。

そうではなく、その新しいことが元々のあり方を無化することはありませんということである。このように元々のあり方を重視することと、新しいことを学ぶことは決して相対立することなく、両立するのである。陸はド・メーストルの共同体の改良可能性をそのように理解していた。

以上から、改良可能性は常にあるものの、しかし伝統知を土台とする「レーゾン・ナショナル」に「大和魂の如きもの」を陸は見出したというテーゼにわれわれは辿りつく。啓蒙主義が主張する科学的知によってカトリック的な伝統的知が斥けられている状況に対して、カトリック的な伝統知の集合性ないし全体性の優位を説くド・メーストルの主張に、陸は明治における日本の伝統的な知なり思想の置かれている状況を重ね合わせた。明治期においてヨーロッパの知らないし思想が入ってきて、日本の伝統的ないし思想が斥けられつつある中で、ヨーロッパの知らないし思想を拒絶することなく、伝統的ないし思想を再評価するしかたを、陸はド・メーストルの思想の中に見出したのだ。そのことを、次に陸の主著である『近時政論考』を検討する中で、確認していく。

4. 『近時政論考』の検討

ここから陸の主著である『近時政論考』の中で論じられている陸自身の思想、国民論派、すなわちナショナリズムを見ていく。そこでド・メーストルの共同体論が陸のナショナリズムの根幹になっていることを確認する算段である。まず、陸が「独逸の学者ラインホルド・シュミード氏」と「伊太利の学者ジョゼフ・ド・メーストル氏」²⁴⁾を引用しながら、次のように論じているところから始めたい。

斯の如く欧州の諸学者は当時ナポレオンの軍事的勢力に反動して国民論派を拡張したり。此の論派がついに勝利を占めて欧州諸国は互いに其特立を全ふし、独逸及伊太利の如きは当時非常の屈辱に遭ひしにも拘らず、今日は世界強国の中に算入せらる。是れ一に国民的精神の發達に因らずんばならず。²⁵⁾

まずド・メーストルの思想を自身の国民論派の思想として陸が考えていること、そしてその国民論派は「反動」と「特立」という概念で特徴づけられていることがここで確認できる。そしてド・メーストルの思想に対して次のような解釈を提示する。

わが国民論派の欧化主義に反動して起りたるは、なお彼の国民論派の仏国压制に反動して起りたるがごときのみ。日本人民が欧州の文化に向かつて伏拝したることはまさに欧州諸邦の人民が仏国の兵威に向かつて伏拝したると同一般なり。²⁶⁾

このように、『主権原論』においてド・メーストルの「レーゾン・ナショナル」の概念は「大

和魂の如きもの」とした陸の解釈が、彼の主著の『近時政論考』においても繰り返されていることが確認できる。ド・メーストルがフランスにおける啓蒙主義に対抗する姿に、日本がヨーロッパ化に対抗する姿を陸はここで重ね合わせている。そこで日本の「特立」を主張し、伝統的な知らないし思想を拠り所にするを陸は要求している。その際、この陸の考え方を支えているのはド・メーストルの思想だということをこの箇所は表している。そして陸は自身のナショナリズムを以下のように定式化する。

国民的政治〔ナショナル・ポリチック〕とは外に対して国民の特立を意味し、而して内に於ては国民の統一を意味す。国民の統一とはおよそ本来において国民全体に属すべきものは必ずこれを国民的にするの謂なり。²⁷⁾

このような彼のナショナリズムの定式化は、彼の他の論考においても見られ、これは彼の思想の根幹をなしていると言ってよい²⁸⁾。このように、新しい知らないし思想に触れる中で、自らの既存の知らないし思想を否定せずに土台にすることが「特立」である。さらにその土台に共同体的性格ないし集合的性格が付加される。それが「統一」という言葉で表現されている。「特立」と「統一」というふたつの要素はド・メーストルの『主権原論』の中で見られるものであるし、何よりこのふたつの要素が不可分なものとして扱われているところにも、ド・メーストルの思想から陸が受容したことが表現されていると言えるだろう。日本が伝統的価値観を捨て、ヨーロッパからの知識や思想を無批判に受け入れている「特立」なき状況（福沢諭吉や自由民権運動論者たちに代表される明治知識人第一世代が主張する欧化主義が広く受け入れられた当時の日本の状況）では、何よりも問題なのは、日本国民の「統一」が失われ、分裂してしまうということであると考える方が、ここでは提示されている。このような考え方にこそ、啓蒙主義哲学が主張する個人主義は何よりも、伝統的知の共同性を破壊し、同時に人間の共同性も破壊してしまうとするド・メーストルの思想に対する陸の解釈が表現されている。

そして伝統知の共同体は新しい知に対して決して排他的ではなく、新しい知を受け入れることでこの共同体が改良されていくことをド・メーストルは主張しているが、陸のナショナリズムにもそうした主張を見出すことができる。

国民論派は実に欧化風潮に反対して起りたり。然れども此の論派はただに欧化風潮を停止することを以て満足するものにあらず。尚ほ進んで日本の社交上及政事上に構成的論旨を有するものなり。去れば国民論派は一時の反動的論派にあらずして、将来永遠に大目的を有するところの新論派と云ふべし。彼れ固より自由の理を識認す。然れども自由なるものは智識の進歩に応じて存することを信ず。彼固より平等の義を識認す。然れども平等なるものは道德の發育とともに生ずることを信ず。智識は自由の本なり道德は平等の源なり、自由の理明らかに平等の義立ちて、而して国民的政治は全きを得。自治の能なきものは人に治められざる

を得ず。自營の力なきものは他に制せられざるを得ず。自由は智識の進歩して固有の能力を用ゆる者ほど多く之れを有す。貴賤の間に礼讓存し貧富の交に敬愛行はれ、而して後に始めて平等の義、国民一致の実相を見るべし。²⁹⁾

ヨーロッパから輸入した自由や平等といった新しい価値観を陸のナショナリズムは拒絶しない。しかしそうした新しい価値観は既存の価値観との関係性の中で取り入れられねばならない。新しい価値観でもって既存の価値観を放棄するのではなく、既存の価値観の「進歩」という形で、既存の価値観の延長線上で新しい価値観は受け入れられねばならない。まずはわれわれ自身が最初からもっている知なり価値観から出発するより他はないのだ。このような陸の思想に、ジョゼフ・ド・メーストルが主張する真理の共同体の改良可能性の思想の影響を認めることができる。

ここで、陸がナショナリズムを学んだのは、決してド・メーストルからだけではないことは留意されなければならない。陸に関する研究において、ブルンチュリの『一般国家学(1875)』³⁰⁾ やノヴィコフの『国際政治(1886)』³¹⁾ については、その重要性が指摘されることがある。³²⁾ 本論文はこの点に対して異議を唱えるものではない。しかし、そうした論者の中でもジョゼフ・ド・メーストルが陸にとって最も重要であったということが本論文の主張である。そして、ブルンチュリの『一般国家学』にしても、ノヴィコフの『国際政治』にしても、たしかにナショナリティを重要視する点で陸の「特立」には思想的にかかわっていることは主張できるかもしれないが、しかし真理の共同体の改良可能性のモチーフを見出すことができないということにこの主張の論拠を求める。このモチーフこそが、陸のナショナリズムを特徴づけるものであって、その点で陸の思想におけるド・メーストルの重要性を主張することに正当性がある。

そしてこの特徴こそ、丸山真男が陸の思想において評価したものだった。丸山が陸のナショナリズムを「進歩的」、「健康的」と評したことをイントロダクションで紹介したが、その際丸山は、陸のナショナリズムが自身を「反動的なショーヴィニズムから峻別」³³⁾ し、「自由主義を単純に「外来」思想とみなす謬見に対して、(……)その発生の内[・]在[・]的[・]な[・]必[・]然[・]性[・]を[・]指[・]摘[・]す[・]る[・]」³⁴⁾ ことを根拠とした。つまり、陸のナショナリズムは外来思想を決して拒絶せず、自らの内[・]在[・]的[・]な[・]発[・]展[・]と[・]し[・]て[・]受[・]け[・]入[・]れ[・]る[・]か[・]ら[・]こ[・]そ[・]、「進歩的」かつ「健康的」であると丸山は評価するのである。それはまさしく、ド・メーストルから陸が受け入れた、真理の共同体の改良可能性に対して評価である。言い換えると、丸山が日本のナショナリズムの良質な部分として評価したのは、陸が解釈したド・メーストルの思想であったことになる。

5. 結論

陸羯南におけるジョゼフ・ド・メーストルの受容について、これまで十分な研究がなされてこなかった。本論文は陸の思想の中にド・メーストルの決定的な影響を認めることができることを論証した。福沢諭吉や自由民権運動論者などに代表される明治期の知識人の第一世代が、ヨー

ロップアの知らないし思想を積極的に取り入れるとともに、日本の既存の知らないし思想を退けようとしたのに対し、日本の欧化に対抗する思想を、陸はド・メーストルの思想に見出したのである。日本の「特立」と「統一」、そしてその「特立」の中でヨーロッパ由来の知や思想を受け入れていく術を、啓蒙主義の個人主義に対して共同体主義を主張するド・メーストルの思想の中に認めたのである。そして、そのことは同時に、日本の「特立」と「統一」は、ド・メーストルという、本来は外部とされるべき思想を土台にしているという矛盾を抱えていることを意味している。明治時代における日本のナショナリズムの誕生はこのような矛盾を内包しているのである。

注

- 1) 丸山真男「陸羯南——人と思想」、『近代日本思想体系 4 陸羯南集』（陸羯南著、植手通有編集解説）、筑摩書房、1987、p.475. もともとは「中央公論」昭和二十二年二月号。
- 2) 宮田昌明「第5章 陸羯南『近時政論考』」、大塚健洋編著『近代日本政治思想史入門』、ミネルヴァ書房、1999、p.89.
- 3) 松田宏一郎『陸 羯南』ミネルヴァ書房、2008、p.33.
- 4) 『近代日本思想体系 4 陸羯南集』、p.46.
- 5) 尚、本書は書誌情報にすら誤りがある。「また、明治一八年九月には『主権原論』と題して、フランスにおける反革命の理論家ジョゼフ・ド・メーストルの論文「人民主権について」(Joseph de Maistre, 'De la souverainet de people', 1794-1795) を翻訳している。」(ibid., p.32) フランス語記載の誤りはともかくとして(正確には De la souveraineté du peuple), この「人民主権について」は本のタイトルではなく(タイトルは Étude sur la souveraineté), 本の第一篇、第一章の表題である。
- 6) 陸羯南『陸羯南全集』（西田長寿・横手通有・坂井勇吉編）、第一巻、みすず書房、1968、p.243.
- 7) 有山輝雄『陸 羯南』日本歴史学会編集、吉川弘文館、2007、pp.84-85.
- 8) 『みすず』、9-10月号、第112号、1968、pp.31-36.
- 9) 「なお、原文との照合は岡和田常忠氏を煩わした。羯南の翻訳の特徴その他については、同氏の「ド・メーストルと陸羯南」(雑誌『みすず』一九六八年九・一〇月号)を参照されたい。」(『陸羯南全集』第一巻、p.698)
- 10) 順番に、『翻訳の言葉と論説の言葉——ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響の序論的な検討——』、『フィロゾフ批判の転生——ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響——』、『日本の使命を説く思想を支え合う在来の言葉と外来の言葉——ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響——』。
- 11) 尚、この作品が書き始められたのは1794年であることは、Vignet des Étoiles 宛の彼の手紙のおかげで知られている。1795年7月28日付の手紙において、彼が出版社とコンタクトを取り、本がほとんど完成したことを述べている。(Maistre, Joseph de, *Œuvres*, dir. Pierre Glaudes, Paris: Robert Laffont, 2007, p.106.)
- 12) Maistre, Joseph de, *Œuvres complètes*, tome 1, Lyon: Vitte 1884, p.375. 「人間にとって、先入見ほど重要なものはない。この言葉を悪く取らないでおこう。それはまったく必ずしも誤った考えを意味するのではなく、この言葉の真の意味にしたがえば、あらゆる考察の前に承認された一切の意見を意味している。」
- 13) 『陸羯南全集』第一巻、p.243.

- 14) Kant, Immanuel: *Kant's gesammelte Schriften*, Band VIII, Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter, 1923, S. 35.
- 15) Maistre, Joseph de, *Œuvres complètes*, tome 6, Lyon: Vitte 1884, p. 19.
- 16) 詳しくは拙著を参照のこと: « La doxa comme base de la pensée : une lecture de Joseph de Maistre », *Doxa : Études sur les formes et la construction de la croyance*, textes réunis par Pascale Hummel, Paris : Philologicum, 2010.
- 17) Maistre, *Œuvres complètes*, tome 1, pp. 375-376. 「またはむしろ、混ざり合った宗教的教義と政治的教義がともに、個人の理性の逸脱を抑圧するのに十分強い、普遍的つまり国民的理性を形成しなければならない。個人の理性は、相違する意見しか生まないので、その本質から、あらゆるつながりを死に至らしめる敵である。」
- 18) 『陸羯南全集』第一巻, p. 243.
- 19) Maistre, *Œuvres complètes*, tome 1, p. 525. 「決してだますことのないレーゾン・ナショナルのもとに結集してほしい。それぞれの国民がその古くからの法と習慣の中に、できる限り幸福になるために必要なものをすべてもっている。これらの尊い法をすべてのあなたがたの再建の仕事の基礎にすることによって、有害な改革に身を委ねることなくあなたがたの改良可能性を展開することができるということを忘れないでほしい。」
- 20) 『陸羯南全集』第一巻, p. 303.
- 21) Maistre, *Œuvres complètes*, tome 1, p. 352. 「さらに、あらゆる極端な命題が誤りであるように、幾人かの賢人によって政治の改良がなされる可能性を私は否定するつもりはない。それは人間の肉体的道徳的改善のための道徳教育と体育の力を否定することに等しい。しかしこの真理は私の主張一般を揺るがすものではなく、逆に裏付けるものである。それは人間の力は何も創造できず、あらゆるものは人民および個人の始原の才能に依存していることを確証する。」
- 22) 『陸羯南全集』第一巻, p. 234.
- 23) Ibid.
- 24) ただし、ド・メーストルが生きたサヴォワ（現在のシャンベリー）はフランスの言語圏かつ文化圏である。
- 25) 『近代日本思想体系 4 陸羯南集』, p. 44.
- 26) Ibid.
- 27) Ibid., p. 45.
- 28) 類似した定式はたとえば、「国民旨義及び東北人士」や『日本』の「創刊の辞」などで確認することができる。
- 29) Ibid., pp. 47-48.
- 30) Bluntschli, Johann Kaspar, *Théorie générale de l'État* (1875), trad. Allemand de Riedmatten, Paris : Guillaumin et Cie, 1877. (陸はフランス語訳を読んだ。)
- 31) Novicow, Jacques, *La Politique internationale*, Paris : Germer Baillière et Cie, 1886.
- 32) この両者の重要性については、例えば松田宏一郎の『陸 羯南』（ミネルヴァ書房、2008年）を参照のこと。
- 33) 『近代日本思想体系 4 陸羯南集』, p. 476.
- 34) Ibid., p. 478.

参考文献

- 陸羯南『陸羯南全集』（西田長寿・横手通有・坂井勇吉編）、全十巻、みすず書房、1968-1985。
 陸羯南『近代日本思想体系 4 陸羯南集』（陸羯南著、植手通有編集解説）、筑摩書房、1987。

- 大塚健洋編著『近代日本政治思想史入門』, ミネルヴァ書房, 1999.
- 松田宏一郎『陸 羯南』, ミネルヴァ書房, 2008.
- 有山輝雄『陸 羯南』, 日本歴史学会編集, 吉川弘文館, 2007.
- 岡和田常忠「陸羯南とジョゼフ・ド・メーストル」, 『みすず』, 9-10月号, 第112号, 1968, pp. 31-36.
- 田所光男「翻訳の言葉と論説の言葉 — ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響の序論的な検討 —」, 『福岡大学人文論叢』第19号, 第1巻, 1987.
- 田所光男「フィロゾフ批判の転生 — ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響 —」, 『福岡大学人文論叢』第19号, 第2巻, 1987.
- 田所光男「日本の使命を説く思想を支え合う在来の言葉と外来の言葉 — ジョゼフ・ド・メーストルの陸羯南への影響 —」, 『福岡大学人文論叢』第19号, 第3巻, 1987.
- 影浦亮平「ジョゼフ・ド・メーストルにおける近代の神学的解釈」, 京都大学大学院人間・環境学研究所『文明構造論』, 第9号, 2013, pp. 39-66.
- Maistre, Joseph de, *Œuvres complètes*, 14 tomes, Lyon: Vitte 1884-1886.
- Maistre, Joseph de, *Correspondance diplomatique, 1811-1817*, par Albert Blanc, Paris : Librairie Nouvelle 1860.
- Maistre, Joseph de, *Œuvres*, dir. Pierre Glaudes, Paris : Robert Laffont, 2007.
- Kant, Immanuel: *Kant's gesammelte Schriften*, Band VIII, Herausgegeben von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften, Berlin und Leipzig: Walter de Gruyter, 1923.
- Bluntschli, Johann Kaspar, *Théorie générale de l'État* (1875) , trad. Allemand de Riedmatten, Paris : Guillaumin et Cie, 1877.
- Novicow, Jacques, *La Politique internationale*, Paris : Germer Baillière et Cie, 1886.
- Kageura, Ryohei, « La doxa comme base de la pensée : une lecture de Joseph de Maistre », *Doxa : Études sur les formes et la construction de la croyance*, textes réunis par Pascale Hummel, Paris : Philologicum, 2010, pp. 219-230.
- Kageura, Ryohei, "Maistrian Themes in Walter Benjamin's Sociology", *Joseph de Maistre and His European Readers: From Friedrich von Gentz to Isaiah Berlin*, Brill Academic Publishers, 2011, pp. 151-170.

